

一般の部 最優秀賞『図書館の深海魚』より

エレベーターが地下二階に到着し、ドアが開くと、そこは真っ暗闇だった。

ギョッとしたが、普段は節電の為に消灯されていることを思い出した私は、エレベーターから出るとすぐに扉横のスイッチを入れた。

パッと電気が付くと、一瞬にして目の前に夥^{おびただ}しい数の本が現れた。

間違いなく、ここは書庫だ。この図書館で働く者しか入れない、閉架書庫である。

静まり返ったその場所は、まさしく「シーン」という表現がぴったり当てはまる。

手にしていた小さなゼムクリップを床に落とした時、本当に「ポトリ」と音が聞こえたのには驚いた。

この閉架書庫はまさしく「本の海、だった。

勿論、地上の開架書庫にもここかしこに無数の本が並べられているが、辺りを歩く人間の空気の動きや息吹がある。

貸出手続きをするカウンターには、やり取りの声^{にぎ}がして、それなりの賑わいも感じられる。

しかし、地下にひっそりと存在するこの閉架書庫は、まるで深海の如^{ごと}き静けさを保っていた。

学生から持ってきてほしいと依頼された本を、背表紙の記号・番号を頼りにウロウロと探し回る私は、

まるで深海に迷い込んだ一匹の魚のよう――。

それが初めてこの図書館の閉架書庫に入った時の、私の印象だった。

(続きは、小諸市オフィシャルサイト「第26回小諸・藤村文学賞選考結果について」でご覧ください)

写真：【一般の部】最優秀賞受賞 植田郁子さん表彰の様子

長く書き続けてこられた秘訣はありますか？

「継続は力なり」、この言葉に励まされて書き続けてこられた、ということがあります。

ですが、単純にただ「書くことが好き」だから続いている、というのが本当のところだと思っています。好きなことなので、気がつけばパソコンや机に向かって、何かと書いています。今や、書くことは私の生活の一部です。

書くことの一番の喜びはどんなことですか？ 書くことを通して嬉^{うれ}しかった経験を教えてください。

読んで下さった方が「面白かった」「感動した」と言ってくれた時に、やはり一番、喜びを感じます。お読みいただいた後、皆様の心にパッと明るい光が灯^{とも}るような作品を書きたいいつも思っています。かつこよく聞こえるかもしれないませんが「皆様の喜びが自分の喜び」という感じです。

嬉しかった経験は色々ありますが、三十代の後半で初めて書いたエッセイが、初めて送ったコンクールで入賞したことが忘れられません。ビギナーズ・ラックだったと思うのですが、驚きと感動で胸がいっぱいでした。

これからも自分の作品が、ほんの少しでも皆様の幸せに貢献できれば幸いです。